やさしい美術

やさびのいと

▲新潟県妻有研修の様子。ジェームズ・タレル「光の館」にて

謹賀新年

新年あけましておめでとうございます。昨年はデザインチームが4年間の共同開発の末、マルチBOX～私の美術館～(60個)の足助病院への納品を完了し、実際に患者さんに使っていただいています。また、私たちプロジェクトと作家・河合正嗣氏が企画し、病院職員の皆さんと手作りで「河合正嗣展」を開催するなど、実りの多い1年を過ごす事ができました。また、文部科学省の教育改革支援プログラム(現代GP)に採択され、より活動の幅が広がったと同時に、この活動が多くの方々の「つながり」と「やさしさ」に支えられていることを実感しています。さらに今年は昨年の新メンバーが企画し、制作してきた作品搬入はもちろんのこと、水面下で動いていたものが具体的な提案や作品につながることでしょう。昨年から新たに活動の場に加わった発達センターちよだでの美術体験講座やシンポジウムに向けての活動、そして新潟県で2009年に開催予定の「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」に向けた活動など、確実に私たちの活動はより地域に向けて広がり続けています。今年も足助町の皆さんをはじめ、たくさんの方々のやさしさを力に進み続けれたらと思います。皆さまのご支援心よりお願い申し上げます。(文・竹中／張)

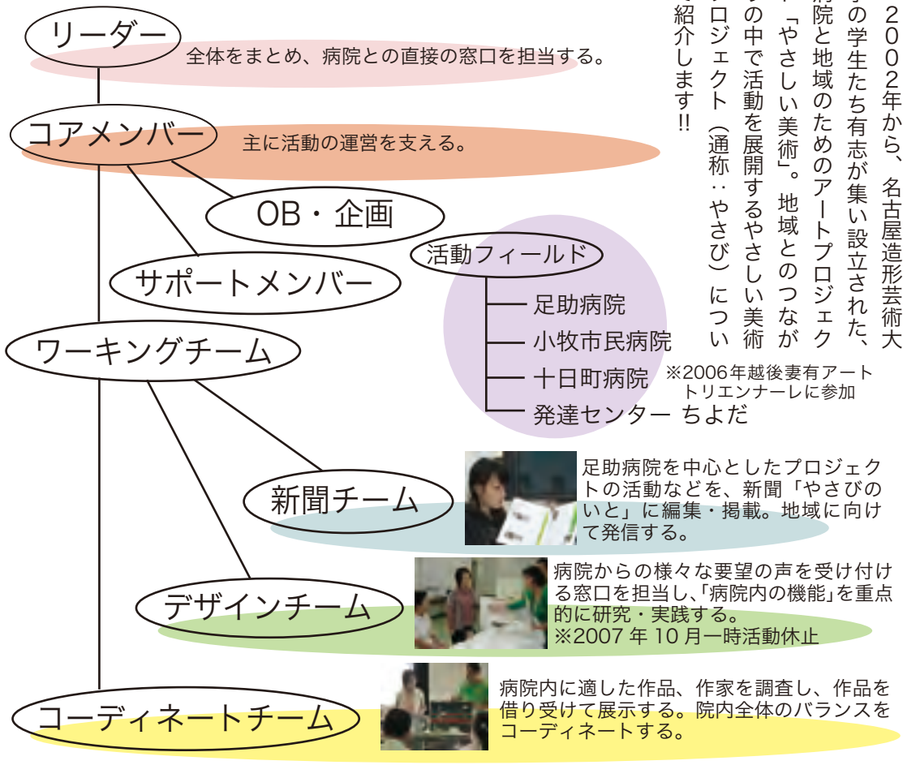
もくじ

・謹賀新年 P1
・やさ美大図解 P2
・心に響くコトバを届けたい
・大地に根付くように～越後妻有トリエンナーレに向けて～ P3
・連載
・今月のマルチBOX～私の美術館～
・アマノの一言拡大版～コトバノみくじ～ P4
・今月のえんがわ P5
・みちのくぶらり 足助旅
・発見！町中アート P6
・病院職員が選ぶ オススメ○○！
・院長の一句 P7
・妻有研修紀行
・ベッキ牛。編集長の「痛いけな私」
・編集後記
・お知らせ P8

やさ美大図解

やさしい美術プロジェクトの全貌をお見せします！

2002年から、名古屋造形芸術大学の学生たち有志が集い設立された、病院と地域のためのアートプロジェクト「やさしい美術」。地域とのつながりの中で活動を展開するやさしい美術プロジェクト（通称：やさび）について紹介します!!



作品展示のながれ

作品プラン
病院訪問や現地調査を参考に、各メンバーが作品を考案する。

ミーティング
学内での研究会を週に一度以上行い、作品プランについて意見を出し合い、検討する。

研究会
病院職員と、直接作品についての意見を交わす。展示の際の具体的な問題点やアドバイスを戴く。

試作・経過報告
作品が具体的なものになると、病院での研究会で試作品の発表や経過報告を重ね、さらに作り込んでいく。

仮設置
実際に展示場所で試作品を設置することで、改善点などを発見することが出来る。

本設置
展示場所、作品設置上の危険性などの問題をクリアし、ようやく病院に設置することが出来る。

メンテナンス
作品の破損・汚れなどを定期的に点検・修理。配布作品などの場合は、補充をする。

搬出
設置期間を終え、作品を病院から運び出す。

年間行事

◇説明会
新メンバー募集のため、大学内で行われます。

◇病院訪問・現地調査
実際に病院に訪れて見学したり、周辺地域の調査をします。

◇研究会
作品の企画案を出したり経過報告をします。直接、病院職員と意見を交わす機会にもなります。

◇活動報告会
やさしい美術プロジェクトの活動や作品などを、地域に向けて報告します。

その他の活動

◆企画展　◆ワークショップ
（参加型企画）

病院の協力のもと企画し、患者さんや地域の方々との美術での交流をはかる。

心に響くコトバを届けたい

～天野 入華「コトバノみくじ」作品インタビュー～

12月下旬に足助病院に設置された、前回の「コトバノツブ」の姉妹となるような作品「コトバノみくじ」について、作者・天野 入華さんにお話を聞きました。

この作品を作ろうと思ったきっかけを教えて下さい。

風邪をひいて寝込んで動けなかった時、本を読んだりして文章や言葉に触れることで、落ち込んだ気持ちが少し救われたというか、本や文を読むことが生活の中での楽しみになっていたなと思ったのが始まりです。今回は年末年始の患者さんたちの身近な楽しみになれば、と思って作りました。

実際、病院に設置するにあたって、どういった点を工夫されましたか？

重くなく、でもちょっとしたことでも壊れない。自立して置けるものを考えました。言葉がパッと浮かぶ様子をイメージして帽子のモチーフに決め、明るくてやさしい印象のものにしました。

作品の見どころはどこですか？

とにかく手にとって見てもらうのが1番ですが、自然に由来した色を多く使っているおみくじなので、自然の風景などを思い浮かべる機会になれば良いと思います。おみくじ独特のワクワク感とか、作品を見て何か感じてくれれば嬉しいですね。

今後の展開などあればお願いします。

以前制作したものと新しく作った作品は帽子型の箱から自由に持ち帰る形式は同じなのですが、伝えたいものっていうのは言葉だけではない気がしていて、それで今回は色を使ったんです。今後作っていきたいものは例えば絵であったり、匂いであったり、色んな感覚で感じとってもらえる作品ができたらいいと思います。

最後に、天野さんにとってコトバとはなんでしょうか？

誰でも1番伝わりやすくストレートに、簡単にカタチにできるものだと思います。（インタビュー・張 祐寿）

▲「コトバノみくじ」の、おみくじ箱の制作の様子。天野が作品の素材と向き合い、会話しているようにも見える。

▲前回の作品「コトバノツブ」今回の作品は、和風の雰囲気を取り入れたデザインになっいる。

大地に根付くように

～越後妻有アートトリエンナーレに向けて～

新潟県の妻有地区で3年に1度、地域との協働で開催される「越後妻有アートトリエンナーレ」。その第3回目にあたる2006年に私たちは十日町病院との協働で参加しました。活動の舞台となった新潟県十日町市周辺に幾度となく足を運び、調査・取材を重ね、病院職員の方々と一緒に作品の構想を練り上げていきました。遠く見知らぬ地での活動に最初は戸惑いを感じていたメンバーも、作品を通した患者さんとの何気ない会話や交流の中で少しずつ和らぎ、人と人、人と地域がつながる他では味わえないような素晴らしい体験をさせていただきました。

アートトリエンナーレの会期が終了し、作品がすべて搬出された後もなお、十日町病院では「ミナーレ（見て下さいの意）」の名で院内に展示スペースを設置し、地域住民の方々に解放する取り組みを始めたそうです。短い期間でしたが、地域の方々との出会いや妻有の里山に流れるやさしい時間は、私たちの心の中に小さな絆という葉を芽吹かせてくれました。それはこの祭典に参加した誰にとってもいつまでも朽ち果てぬ「作品」となったに違いありません。次回、妻有アートトリエンナーレの開催は2009年。私たちは再び「第2のふるさと」への里帰りを目指し、歩き始めようとしています。

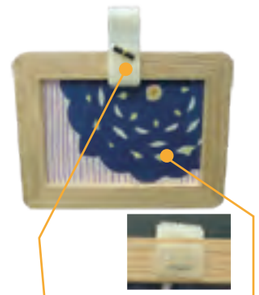
（文・ベッキ井）

▲十日町病院での作品の企画発表の様子

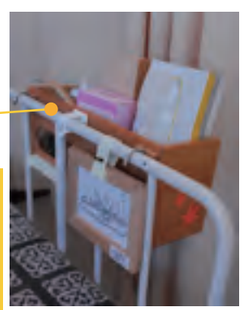
▲伊東 里奈「ピンクの穴」

今月のBOXチ
～私の美術館～

病院で入院生活をしている患者さんのためにデザインチームが考案した、ベッドサイドに取り付け、身近なものを収納するための「マルチBOX～私の美術館～」。実際に使用する患者さんの声を反映し、4年もの開発の末に設置が実現しました。その全容をお見せします！



デザインチームからやさしい美術プロジェクトデザインチームはメンバーの卒業により活動を一時休止することになりました。今後はマルチBOXのメンテナンス、絵はがきの提供などはメンバーたちに受け継がれて行きます。



実際にベッドサイドに設置した様子。
患者さんの邪魔にならず、すぐ手の届く所にあって GOOD!

アマノの一言 特別版
～コトバノみくじ～

大吉

今月の色は「虹色」

終わりがあって始まりがある
1つとして留まることはない
瞬間の美しさ
瞬間の鮮やかさ
それはまるで虹のように
色とりどりの線を描き
心の中にだけは
今も留まっているの

今回は自作の詩です。虹という7色の色の意味を持った言葉を使いたかったのです。雨上がりに虹を見つけた時のハッとする嬉しさ。今年もそんな嬉しさにたくさん出会える年になりますように。

今月のえんがわ画廊
11月・12月

足助病院の一角、ネームプレート下に小さなギャラリーを作りました。
名前はえんがわ画廊。毎月ちいさな美術品がやってきます。
ここでは「えんがわ」に展示された作品の作者のみなさんにお話を聞きます。

11月の作品「Jelly(ジェリィ)」の作者・細川 貴恵さんにお話を聞きました。

どんな事を意識して作りましたか？
私も昔ちょっとだけ入院していた事があって、病院ってすごく色がない空間だなと感じていて。そこにキャンディみたいなきれいな色のものがあったら、楽しい空気になるんだろうなと思い作りました。

この作品はどんな素材でできているんですか？
私は手紙を書くのが好きで便せんを手作りしていて、そのための紙をいつも集めています。雑誌の切り抜きとかチョコの包み紙とか化粧品の箱とか…そういうものを今回の作品にも使っています。

足助病院を訪れた印象は？
入院してるおばあちゃんと看護婦さんの会話を聞いて、病院で働いてる人たちや生活をしている人たちが皆前向きだなって思って、私も元気になれた気がします。

▲「Jelly」キャンディのような色とりどりの紙で作られた作品が病院の廊下を彩る。

12月の作品「こつつみ」の作者・柴田さゆりさんにお話を聞きました。

この「こつつみ」はどんな作品ですか？
テーマは「身近な物でのラッピング」です。普段ラッピングっていうと、きれいなリボンや包装紙を買って包むものですが、もっと身近な物を使ってその人らしいラッピングが出来ると思うんです。

この作品はどのようにしてできたのですか？
友達の誕生日を当日に知って「じゃあ何か贈らなきゃ！」という時、よく身近なものでラッピングをしていて、それを作品にできないかなと思いました。

タイトルの「こつつみ」とはどういう意味ですか？
「包む」という事と、「ちょっとしたうれしさ」の「ちょっと」を合わせた言葉です。普段お店で売ってる豪華な「大包み」に対して素朴で身近な存在という意味を込めています。

▲「こつつみ」コーヒーフィルターなど、何気ない身近な物で包まれたプレゼントは贈る人の気持ちも包んでくれる。

お願い
「えんがわ画廊」は足助病院病棟内のギャラリーです。外部の方の鑑賞はできませんので御了承ください。

作　家　紹　介

ほそかわ きえ
細川　貴恵

１９８３年生まれ
愛知県一宮市在住
名古屋造形芸術大学洋画コース２年次在学中

主な活動／若手作家が企画・運営を行うギャラリー airs' box（エアーズボックス）での作品展示、クリエイターズマーケットへの出店など。

しばた
柴田　さゆり

１９８６年生まれ
愛知県瀬戸市在住
名古屋造形芸術大学視覚伝達デザインコース３年次在学中

「えんがわ画廊」関連企画として足助病院の入院患者さんへ贈るクリスマスプレゼントのラッピングコーディネートを行う。

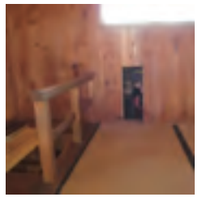
みちのくぶらり足助旅

拝啓　そちらは新年真っ盛りでしょうか。私たちはもみじ染まる足助城にきております。

今回の旅はP5連載「今月のえんがわ画廊」12月の作家、柴田さんの作品材料の野草採集に行って参りました！みなさんも、小さな季節を見つけてみてはいかがでしょう。

▲足助城までの道のりは、紅葉の木もれ日のトンネルが私達の目を楽しませてくれます

▼いざ足助城本丸へ！入り口をくぐればそこはお宝（野草）あふれる戦場


▼お城の階段わきには、合戦時に女・子どもが身を隠す「隠し部屋」があるそうな…

▲こじんまりしつつも凛々しい山城からの街並は模型のよう

▲拾ったツルを頭にまくと、気分は絵本の住人になったかのよう

▲「い」「ろ」「は」「に」「ほ」「へ」「と」の7又に分かれている楓は「いろはかえで」といわれる
＊写真のものは「いろはかえで」ではありません

そこで

採集した木の実や葉っぱを使った「やさびのいと」だけのラッピングを、「えんがわ画廊」12月の作家、柴田さんに教えてもらいました！

▲柴田 さゆりさん

用意するもの
・木の実、葉っぱ　・テープ　・接着剤
・枝、ツル　・紙
・箱（包みたいもの）　・ラップ

作り方
① 最初に紙で箱を包み、折り目を付けて折る所を確認する。
② ①を広げ、側面に一周巻き付けるかたちになるよう、枝を三本貼る。
③ ②の枝に、バランスを見ながら接着剤で実や葉っぱを付ける。
注！②③の接着をする際、角になる部分に硬い枝や実を付けると折れてしまったり取れてしまうので、避けて下さい。
④ ラップを紙より少し大きめにカットする。（こうすることにより、接着した実や葉っぱが落ちるのを防ぎます。
⑤ 紙の上にラップを被せて、一緒に包む。
⑥ 取っ手になる細い木の枝やツルを、半円形に曲げる。
⑦ ⑤の取っ手の取り付け部分となるところに穴をあけ、⑥の両端をそれぞれ通す。
⑧ 裏をテープで留め、完成！

発見！町中アート

夜に漂う記憶の迷宮

あなたは見覚えのない景色を懐かしく思うことはないだろうか。横浜の片隅で見つけたY字路。

60年代の美術家に横尾忠則が居る。横尾はY字路に魅入られ、Y字路を題材にした油絵を描き始めた。彼の描くY字路は懐かしさを称えながらも、どこか不気味な雰囲気を持っている。このY字路に並ぶスナックのネオンは横浜に生きる人々の記憶を街に透過させ、まるで人々の記憶を投影する幻灯機のように灯る。私たちは彼らの「記憶」と言うドラマを無意識のうちに見てしまうのかもしれない。横尾の描くY字路もまた彼の記憶とそこに生きた人間たちの記憶が交錯し、一つの誰でもない記憶を作り出しているようだ。（文・ベッキ丼）

▲横浜・野毛の大岡川付近のＹ字路。どこか懐かしい。

病院職員が選ぶオススメ〇〇!!

第二回　絵本

推薦者：鈴木 祥子先生
（足助病院管理栄養士）

オススメ：「あおくんときいろちゃん」
作：レオ・レオーニ
「うさこちゃんシリーズ」
作：ディック・ブルーナ

▶うさこちゃんシリーズ

◀▼「あおくんときいろちゃん」

「おわりってあっても、おわりじゃない絵本がある。」まるで子どものように語る鈴木先生。子どもの頃に読んでいた絵本は、今でも先生のお母さんが大切にとってくれているそう。その中の2冊が、今回のオススメ。この2冊は子どもの想像力をかき立てるため、色や線がとても単純に描かれているのに、自然と表情が感じとれるから不思議。「こんなに奥深いものなんだと大人になって知った。」と先生。「絵本は、その人が最初に触れる初めての『本』。大人になっても懐かしいし、新しい発見もある。だから子どもにも読んであげたいと思う。」子どもの頃の思い出の本「絵本」。あなたはなにを読みましたか？（編集・ベッキ丼）

絵本の紹介

足助病院1階の内科待ち合いに設置されたやさしい美術メンバー井木宏美さんの絵本、「しわ」「いいなぁ」「やさしく、やさしく」。やわらかく、ほのぼのとしたまなざしで「ひと」を見つめた絵本です。是非ご覧下さい!!

作者から

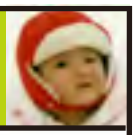
幼い頃、診察の待ち時間。不安と退屈の中、待合室にある絵本があるだけでその気持ちはずいぶんと紛れました。そんなことを思い出し、手にとった瞬間に暖かみが伝えられるような絵本を作りたいなぁと思い制作したのがこの3冊です。（井木 宏美）

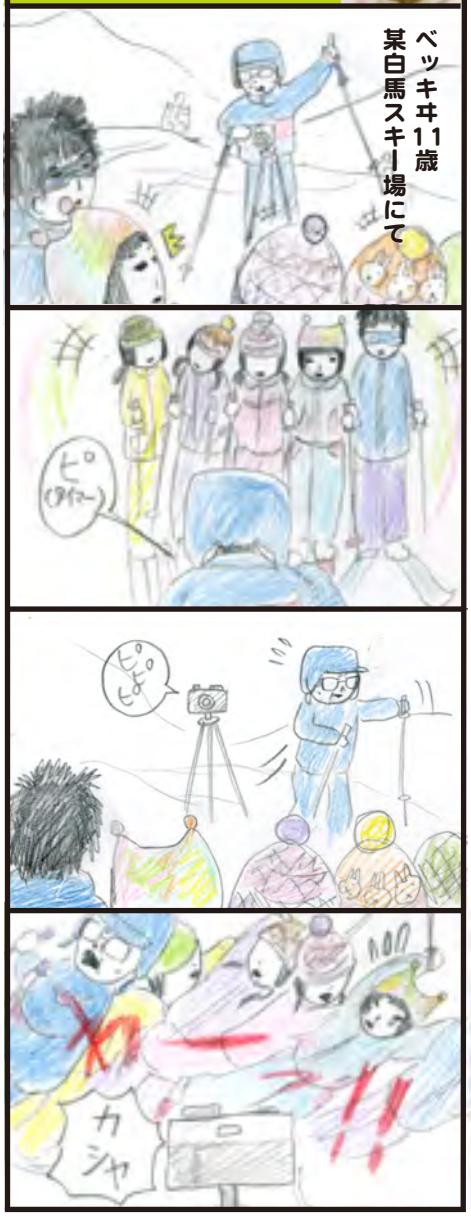
院長の一句

富は知恵を妨げる

苦労すればする程、いい考えが浮ぶものです。一生懸命になりましょう。

ベッキヰ。編集長の「痛いけな私」





妻有研修紀行

10月28日 名前 浅野瑠璃子（あさのるりこ）

今回初めて妻有を訪ずれ、自然の豊かさに驚かされました。肌にすいつくような、やさしい空気。深呼吸すると、肺いっぱいに、冷えて澄んだ空気が流れこみ、「このまま寝ころんだら、私の体からも草がはえてきそう」と思えるほど、気持ちよかったです。そして、この地に作品を置いた作家さんの思いにふれ、心温まる研修旅行でした。

編集室から……

あけましておめでとうございます。新年早々めでたくも、やさびのいと第二号を発行する運びとなりました。これを手にして下さった皆さまに、改めてお礼申し上げます。厳しい寒さが続いておりますが、現在当プロジェクトでは新メンバーの制作した作品を足助病院に搬入する時期に入り、活動は盛り上がりを見せていて、今後の展開が楽しみだと思う今日この頃です。その熱意と協働の様子がやさびのいとを通して皆さんに伝えられるよう一同、日々邁進してゆきたいと思います。本誌を含め、今年のやさしい美術プロジェクトの活動を見守っていただけたら幸いです。（文・竹中 仁美）

てんやわんややぁ!!

走り回る師のごとく、てんてこ舞いな年末でした。今年も裸祭りのような勢いで駆け抜けていきます!!!

ご意見・ご要望

皆様のご意見・ご感想・ご要望をお聞かせ下さい！下記連絡先にてお待ちしております。

〒485-8563
愛知県小牧市大字大草字年上坂 6004
名古屋造形芸術大学
やさしい美術
プロジェクト
「やさびのいと」係

MAIL：
gpnews@nzu.ac.jp
FAX：
0568-79-1070
＊FAX 番号は名古屋造形大学のものと共通ですので、必ず" やさしい美術プロジェクト「やさびのいと」係"とご明記下さい。

発行　名古屋造形芸術大学
平成 19 年度 文部科学省 現代 GP 採択事業
やさしい美術プロジェクト
やさびのいと編集部 赤塚 ベッキヰ　泉 麻衣子
竹中 仁美　張 祐寿
協力　足助病院　足助町の皆さん
十日町病院

お知らせ

絵はがきプロジェクト
絵はがき募集!!

足助病院で入院患者さんが使用している絵はがきフレーム付き小物入れ『わたしの美術館』に飾る絵はがき作品を募集しています！

皆さんのやさしい気持ちをお届けします。どうぞご参加ください！

【募集要項】
はがきサイズ
縦100ミリ×
横148ミリ（横描き）
季節感ある絵はがきをお待ちしています！

＊患者さんに届けるため選定する事もあります。
＊作品はお返しできません。
＊作品が飾られた様子を撮影し、新聞に掲載する場合があります。